

機関番号：32692  
 研究種目：新学術領域研究（研究課題提案型）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20200043  
 研究課題名（和文） 逸脱を吸収する社会実現に向けたコミュニケーションギャップ生成－解消機構の解明  
 研究課題名（英文） Elucidating the generation-dissolution mechanism of communication gaps toward the realization of mental deviation absorbing society  
 研究代表者  
 榎本 美香（ENOMOTO MIKA）  
 東京工科大学・メディア学部・助教  
 研究者番号：10454141

研究成果の概要（和文）：本研究では、統合失調症や高次脳機能障害という病名が与えられた人々（the Communication Handicapped; CH）が個々に持つ社会的・個人的属性や会話の個々の構成物（発話や身振り）の相互作用が作り出すコミュニケーションシステムにおいて、コミュニケーションギャップが検出され、排除/吸収されていく過程のメカニズムを解明した。

研究成果の概要（英文）：The outcome of this research aims to contribute to the welfare of the communication-handicapped (i.e. people with schizoid personality disorder or higher brain dysfunction) by focusing on communication gaps in conversations of/with them. We elucidated the mechanism of how the gaps are detected, dissolved, and absorbed by participants in conversation from the perspective that the social-personal attributes and the verbal and nonverbal components of conversational acts interact with one another in communication.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	9,500,000	2,850,000	12,350,000
2009年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
2010年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
年度			
年度			
総計	24,400,000	7,320,000	31,720,000

研究分野：社会科学、医歯薬学

科研費の分科・細目：社会学、境界医学・社会学、医療社会学

キーワード：コミュニケーション、逸脱、統合失調症、高次脳機能障害、メタ認知、認知障害、インタラクション、会話分析

## 1. 研究開始当初の背景

慢性期に入った高次脳機能障害者や精神障害者に共通の認知障害が認められるようになってきたが、コミュニケーションを支える他者の態度や思考に対するメタ認知を含む社会的機能には未着手のままであった。我が国では、精神病院の増床政策がとられてきたが、昨今では医療費削減のあおりを受け、病床数削減、入院費負担削減が精神病棟でも行われている。そこで彼らが施設の外に出た時、そこで周囲の人々とのような形でコミ

ュニケートしていくのか、という社会的機能に関する問題を早急に解明する必要がある。

## 2. 研究の目的

対象とするのは高次脳機能障害、および統合失調症や鬱病などの精神障害を持つ者と、その家族や治療担当者、さらには一般の健常者たちが織りなす会話の場である。そうした会話の場においてそれぞれがもつ会話規範の衝突ないしはすれ違いによって生じるコミュニケーションギャップの解消を引き起こ

す社会的方略と認知メカニズムを解明する。

### 3. 研究の方法

本研究では以下を行う。

- (1) コミュニケーションギャップを含む会話データの収集と整備
- (2) ギャップ発生時に用いられている会話規範の定式化
- (3) ギャップ発生時の会話行動を生み出した認知メカニズムの解明
- (4) ギャップ発生から解消に至る自他の会話規範のメタ認知メカニズムの解明
- (5) 自他ルールへの気づきを促す会話実践

### 4. 研究成果

統合失調症や高次脳機能障害という病名が与えられた人々を含む相互作用が作り出すコミュニケーションシステムにおいて、コミュニケーションギャップが検出され、排除/吸収されていく過程のメカニズムとして以下の3つを解明した。

- (1) コミュニケーションギャップを解消するための会話運用上の規範の定式化：  
-発話の聞き取りや理解の困難さによって生じたコミュニケーションギャップは、その直後に会話参与者全員の問題として取り上げられ、全員の協力によって解消され得ることを示した。  
-患者の「援助を求めること」と「分別ある患者であること」との葛藤、医師の「患者を見捨てないこと」と「援助の限界を知らせること」との葛藤の過程を明らかにした。
- (2) コミュニケーションギャップを解消する認知メカニズムの解明：  
- 会話の中で聞き取りや理解ができなかった聞き手は、自己の認知状態をその場で参与者全員にディスプレイすることで、互いの認知の食い違いが<やりとり>を通じて解消していくことを示した。
- (3) コミュニケーションギャップの生成-解消に至るメタ認知メカニズムの解明：  
- リフレーミング(他者の発話を言い換えたり情報を付加すること)が高次脳機能障害者に見られないことから、理解を自己のものとする深いレベルのメタ認知的過程が存在することを示した。  
- ある「状況」を個人の「病気」の問題としてではなく、当該の人や関係性の危機として捉えることが、新たな関係性を創出するというメタ=コミュニケーションの枠組みを示した。  
またこれらの知見を、精神科デイケアリハビリテーション実践、アウトリーチ支援としての訪問看護・就労相談などの実践にフィードバックした。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 25 件)

- ① 榎本美香、岡本雅史、修復連鎖終了手続きとしての合意形成フェーズ-コミュニケーションチャレンジドの多人数会話の観察から-、日本認知科学会第 28 回大会論文集、査読有、巻無、2011、568-575
- ② 岡本雅史、榎本美香、修復の権限はいかにして移譲されるか? -多人数会話における第三者修復の事例を通じて、日本語論学会 2010 年度第 13 回大会発表論文集、査読無、6、2011、25-31、[http://implicature.net/pdf/okaeno\\_P\\_SJ2011.pdf](http://implicature.net/pdf/okaeno_P_SJ2011.pdf)
- ③ 串田秀也、追加的解決方法を求める訴え-精神科外来診察におけるデリケートな問題提示の一事例、大阪教育大学紀要 第 II 部門、査読無、60(1)、2011、1-21、[http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/26554/1/kj2\\_6001\\_001.pdf](http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/26554/1/kj2_6001_001.pdf)
- ④ 高梨克也、見えるものとしての身体と認知科学におけるコミュニケーションの位置、人工知能学会資料 SIG、査読無、SKL-09-01、2011、1-6、<http://www.jaist.ac.jp/ks/skl/papers/sig-skl-20110224-1.pdf>
- ⑤ 榎本美香、岡本雅史、多人数会話において修復はどのように生じるか-コミュニケーションにハンディキャップを抱える人を含む雑談データを通じて-、日本認知科学会第 27 回大会論文集、査読有、巻無、2010、366-375、[http://www.jcss.gr.jp/meetings/JCSS2010/pdf/JCSS2010\\_P1-46.pdf](http://www.jcss.gr.jp/meetings/JCSS2010/pdf/JCSS2010_P1-46.pdf)
- ⑥ 榎本美香、串田秀也、小谷泉、松嶋健、ワークショップ：精神障害とコミュニケーション-会話場面から見えてくるもの-、第 26 回社会言語科学学会大会論文集、査読有、巻無、2010、231-239
- ⑦ 榎本美香、イタリア精神保健センターの受付に見る対人的空間、地域リハビリテーション、査読無、5(4)、2010、371-374
- ⑧ 榎本美香、コミュニケーションに根差した地域精神医療、地域リハビリテーション、査読無、5(3)、2010、274-277
- ⑨ 岡本雅史、「一人」で「一緒に」生きること~ジェノヴァの地域医療が示唆する自立と支援の弁証法、地域リハビリテーション、査読無、5(6)、2010、552-557
- ⑩ 串田秀也、診察場面の会話分析-精神病院外来診察室の事例から-、日本語学、査読無、30(2)、2011、42-53
- ⑪ 山川百合子、イタリアの精神医療と地域

- リハビリテーションー精神科医の視点から(2)、地域リハビリテーション、査読無、5(2)、2010、177-181
- ⑫ 山川百合子、イタリアの精神医療と地域リハビリテーションー精神科医の視点から(1)、地域リハビリテーション、査読無、5(1)、2010、78-81
- ⑬ 定村美紀子、奥野純子、山川百合子、柳久子、地域で暮らす統合失調症患者に対する精神科訪問看護の役割：精神科訪問看護利用者の特性と再入院との関連要因、日本プライマリ・ケア連合学会誌、査読有、34(1)、2010、6-13
- ⑭ Mochizuki H, Yamakawa Y, Mochizuki S, Anzai S, Arai M. Structured floral arrangement programme for improving visuospatial working memory in schizophrenia, *Neuropsychol Rehabil*、査読有、20(4)、2010、624-636
- ⑮ 山川百合子、寺島康、田上洋子、小徳勇人、志井田孝、佐藤晋爾、統合失調症通院患者における新規抗精神病薬の使用実態調査、臨床精神薬理、査読有、13(6)、2010、1163-1176
- ⑯ 松嶋健、精神病の潜勢力、潜勢力の芸術ーチャタデッラルテとパオロ・ピーニ美術館の交差から、地域リハビリテーション、査読無、5(8)、2010、747-750
- ⑰ 松嶋健、「近づいてみれば誰一人まともな人はいない」ー〈危機〉に〈みんな〉で対処するイタリア地域精神保健、地域リハビリテーション、査読無、5(7)、2010、662-665
- ⑱ 松岡恵子、小谷泉、山里道彦、金吉晴、外傷性脳損傷の自殺問題のとらえ方：インタビュー談話からの分析、電子情報通信学会技術研究報告、HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎研究会、査読無、110(185)、2010、25-30
- ⑲ 小谷泉、松岡恵子、山川百合子、金吉晴、山里道彦、外傷性脳損傷者における発話速度の分析、均衡生活学、査読有、6(1)、2010、33-37
- ⑳ 小徳勇人、山川百合子、土井永史、弘末明良、志井田孝、寺島康、統合失調症治療 推し進められる“入院から外来へ”の現状と課題、Pharma Medica、査読無、27(2)、2009、85-93
- 21 松嶋健、生成する「テリトリー」としての地域ーイタリアにおけるスローフード運動と精神保健改革運動の交差から（後編）、精神科看護、査読無、36(8)、2009、48-55
- 22 松嶋健、生成する「テリトリー」としての地域ーイタリアにおけるスローフード運動と精神保健改革運動の交差から（前編）、精神科看護、査読無、36(7)、2009、38-44
- 23 松岡恵子、小谷泉、山里道彦、高次能機能障害者における情報通信機器の使用に関する調査、認知リハビリテーション、査読有、14(1)、2009、8-20、<http://reha.cognition.jp/pdf/2009/page008.pdf>
- 24 高梨克也、榎本美香、聞き手行動研究の広がりよ深まり：「誌上討論」の編集にあたって、認知科学、査読無、16(4)、2009、473-474
- 25 山川百合子、井出政行、武島玲子、河合伸念、片野綱大、松坂尚、オランザピン口腔内崩壊錠でコンプライアンスが向上し、就職ができた統合失調症の一例、茨城県立医療大学紀要、査読無、13、2008、75-81、<http://ci.nii.ac.jp/els/110007028431.pdf>
- [学会発表] (計 18 件)
- ① 榎本美香、岡本雅史、修復連鎖の終了手続きとしての合意形成フェーズーコミュニケーション・チャレンジの多人数会話の観察からー、日本認知科学会第 28 回大会、2011 年 9 月 24 日、東京大学 本郷キャンパス(東京都)
- ② Shuya Kushida、2011 Intelligibility and sensitivity of a treatment recommendation: examples from psychiatric consultations in Japan、Paper presented at 3rd International Conference on Conversation Analysis and Clinical Encounters、13 July, 2011、York
- ③ 塚本剛生、室谷優実、岡本雅史、中野有紀子、メタバースアバタへのジェスチャー自動付与に向けたマルチモーダルインタラクションの収集と分析、情報処理学会第 73 回全国大会、2011 年 3 月 3 日、東京工業大学 大岡山キャンパス(東京都)
- ④ 高梨克也、見えるものとしての身体と認知科学におけるコミュニケーションの位置、第 9 回人工知能学会身体知研究会、2011 年 2 月 24 日、慶應義塾大学 三田キャンパス(東京都)
- ⑤ 岡本雅史、榎本美香、修復の権限はいかにして移譲されるか?：多人数会話における第三者修復の事例を通じて、日本語用論学会第 13 回大会、2010 年 12 月 4 日、関西大学 千里山キャンパス(大阪府)
- ⑥ 串田秀也、精神科診察における“糸口”としての留保報告、エスノメソドロジー・会話分析 (EMCA) 研究会 2010 年次研究大会、2010 年 11 月 8 日、京都大学 稲盛財団記念館(京都府)

- ⑦ 串田秀也、相互行為における「制度の境界」、第83回日本社会学会大会、2010年11月6日、名古屋大学 東山キャンパス(愛知県)
- ⑧ 榎本美香、岡本雅史、多人数会話において修復はどのように生じるか—コミュニケーションにハンディキャップを抱える人を含む雑談データを通じて—、日本認知科学会第27回大会、2010年9月17日、神戸大学 鶴甲第1キャンパス(兵庫県)
- ⑨ 榎本美香、串田秀也、小谷泉、松嶋健、精神障害とコミュニケーション—会話場面から見えてくるもの—、第26回社会言語科学会ワークショップ、2010年9月5日、大阪大学 豊中キャンパス(大阪府)
- ⑩ 松岡恵子、小谷泉、山里道彦、金吉晴、外傷性脳損傷の自殺問題のとらえ方：インタビュー談話からの分析、電子情報通信学会技術研究報告、HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎研究会、2010年8月28日、早稲田大学 西早稲田キャンパス(東京都)
- ⑪ 小谷泉、維持期リハビリテーションにおける療法士の職業意識、第37回保健医療社会学会大会、2010年5月22日、大阪大学 豊中キャンパス(大阪府)
- ⑫ 松岡恵子、小谷泉、山川百合子、岡本雅史、榎本美香、前頭葉背外側部障害例におけるインタビュー談話の2年間の経過について、第33回日本高次能機能障害学会、2009年10月29日、ロイトン札幌(北海道)
- ⑬ Kushida Shuya、Reappraising Garfinkel's notion of "self-organizing" setting: An example of negotiation over treatment at a mental clinic、第82回日本社会学会大会、2009年10月12日、立教大学 池袋キャンパス(東京都)
- ⑭ 榎本美香、岡本雅史、高梨克也、伝康晴、会話がほどけるととき：精神障害者の会話にみられるメタコミュニケーション、日本認知科学会第26回大会ワークショップ「コミュニケーションの中のメタ認知—高次脳機能障害や精神障害を抱える人々とのコミュニケーションギャップを手掛かりとして—」、2009年9月12日、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス(神奈川県)
- ⑮ 榎本美香、岡本雅史、串田秀也、小谷泉、松岡恵子、松嶋健、山川百合子、コミュニケーションギャップを解決しない会話トラブル解消プロセスの観察—慢性期統合失調症患者の会話事例を通じて—、第105回日本精神神経学会学術総会、2009年8月21日、神戸商工会議所(兵庫県)
- ⑯ 松嶋健、身体と制度のキアスム—イタリ
- アの精神医療実践からメルロ=ポンティの「制度化」概念を捉えなおす—、日本文化人類学会第43回研究大会、2009年5月30日、大阪国際交流センター(大阪府)
- ⑰ 松嶋健、フランコ・バザーリア、メルロ=ポンティの可能性の実践的展開としての、多文化間精神医学会第16回学術総会、2009年3月27日、川崎市産業振興会館(神奈川県)
- ⑱ 松岡恵子、小谷泉、山里道彦、金吉晴、外傷性脳損傷のインタビューにおける障害への自己言及について、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ HCG シンポジウム第3回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会、2009年3月23日、島根大学 松江キャンパス(島根県)

〔図書〕(計5件)

- ① 松嶋健、京都：京都大学学術出版会、多賀茂、三脇康生(編)医療環境を変える「制度を使った精神療法」の実践と思想(第二版)、2011、375-404
- ② 崎田智子、岡本雅史、東京：研究社出版、言語運用のダイナミズム—認知用語のアプローチ、山梨正明(編)講座：認知言語学のフロンティア第4巻、2010、274
- ③ 木村大治、中村美知夫、高梨克也(編著)、昭和堂、インタラクションの境界と接続、2010、39-68
- ④ 坊野真弓、高梨克也(編著)、東京：オーム社、多人数インタラクションの分析手法、2009、252
- ⑤ 松嶋健、京都：京都大学学術出版会、多賀茂、三脇康生(編)医療環境を変える「制度を使った精神療法」の実践と思想、2008、402-404

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎本 美香 (ENOMOTO MIKA)  
東京工科大学・メディア学部・助教  
研究者番号：10454141

(2) 研究分担者

岡本 雅史 (OKAMOTO MASASHI)  
成蹊大学・理工学部・共同研究員  
研究者番号：30424310

串田 秀也 (KUSHIDA SHUYA)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：70214947

山川 百合子 (YAMAKAWA YURIKO)  
茨城県立医療大学・保健医療学部・講師  
研究者番号：40381420

松嶋 健 (MATSUSHIMA TAKESHI)  
京都大学・人文科学研究所・研究員  
研究者番号：40580882

(3) 連携研究者

高梨 克也 (TAKANASHI KATSUYA)  
京都大学・情報学術センター・研究員  
研究者番号：30423049

(4) 研究協力者

松岡 恵子 (MATSUOKA KEIKO)  
蒲田寺子屋  
小谷 泉 (KOTANI IZUMI)  
筑波大学大学院・ケアステーションコナン